

コロナ禍での大学の言語教育に対する 教員および学生の評価 —オンラインおよび対面授業について—

柿 原 武 史
禪 野 美 帆

要 旨

本稿では、コロナ禍において実施された関西学院大学のスペイン語のオンラインおよび対面授業のさまざまな形態について、学生および教員がどのように評価したのか、アンケート調査の結果を分析し、考察した。文部科学省や他大学の調査では、オンライン授業に対する学生の評価は概ね高いことがわかった。本調査では、学生に対しては、オンライン授業と対面授業を比較した際の満足度、理解度、受講の負担の度合いなどについて尋ね、教員に対しては、教育効果、授業準備の負担、成績評価の問題点などについて尋ねた。その結果、それぞれの授業形態や評価方法の利点および注意すべき点が明らかになった。これらをふまえ、コロナ禍での経験を、今後の授業の改善に活かすための提案を示した。

キーワード：オンライン授業（Online classes）、対面授業（In-Person classes）、スペイン語教育（Spanish Language Education）、学習効果（learning effect）、成績評価（grade evaluation）

I はじめに

先に発表した論文で、筆者らは、おもにコロナ禍における関西学院大学全体と、全学部統一運営をしているスペイン語教育の対応について報告した（柿原・禪野 2022）。本論文では、コロナ禍において実施されたオンラインおよび対面授業について、教員および学生がどのように評価したのか、アン

ケート調査の結果から分析し、考察する。

本論に入る前に、まず、文部科学省や他大学のアンケート結果など、これまでに公表されているデータの概要をまとめておく。文部科学省は、無作為に抽出した学生約3,000名（有効回答者1,744名）を対象に「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査」を行なっている（文部科学省高等教育局総合教育政策局 2020）。また、複数の大学がオンライン授業に関するアンケート調査を学生に対して行なっている。たとえば、関西大学（2020a, 2020b）、京都ノートルダム女子大学（2020）、同志社大学（2020）、立教大学経営学部（2020）、武蔵大学（2020a, 2020c）、早稲田大学（2020a, 2020b）などである。これらのうち、関西大学では、2020年度春学期は一部をのぞいてオンライン授業が実施されたが、秋学期にはすでに原則対面授業に切り替えられた。そのため、春学期にはオンライン授業について、秋学期には対面授業について、それぞれアンケート調査が実施された。また、武蔵大学は、学生だけではなく、教員を対象としたアンケート調査も実施している（2020b）。筆者らが所属する関西学院大学も、毎学期実施している「学修行動と授業に関する調査」の一部として、オンライン授業に関する評価を学生に求めている。

文部科学省のアンケート調査の結果の概要を見ると、オンライン授業に対する全体的な満足度としては、不満に感じる者の割合より満足に感じる者の割合の方が高かった。また、オンライン授業の良かった点としては自分の選んだ場所で授業を受けられることや、自分のペースで学修できることを挙げる回答が多かった。一方で、悪かった点としては友人と授業を受けられない、レポート等の課題が多い、質問等双方向のやりとりの機会が少ない、対面授業より理解しにくいなどの回答が多かった。

先述の各大学によるオンライン授業に関するアンケート調査の結果を見ても、概ね、オンライン授業に対する評価は高かった。「課題が多い」、「集中力がとぎれる」、「身体的な疲れをより感じる」、「孤立感を感じる」、「課題やレポートが出せているのか不安」などの欠点を指摘する回答も見られたが、

文部科学省の調査結果にも挙がっていたような、オンライン授業ならではの長所を評価する学生も多かった。

ほとんどの大学が、学生に対してのみアンケート調査を行っているのに対し、先述のように、武蔵大学は、教員115名が回答したアンケート調査の結果も公表している。それによると、「授業準備に時間がかかる」、「学生とコミュニケーションが取れない・取りにくい」、「学生の理解度を測るのが難しい」、「学生へのフィードバックが大変」などが教員にとって困難な点として挙げられていた。特に、「授業準備に時間がかかる」点については、本稿の最終章でその改善の方向性を検討したい。

II 関西学院大学におけるアンケート調査結果

続いて、関西学院大学の2020年度および2021年度の春学期と秋学期に実施された「学修行動と授業に関する調査」の結果を見てみよう（関西学院大学高等教育推進センター 2020a, 2020b, 2021a, 2021b）。

それによると、ほとんどの授業がオンラインであった2020年度春・秋学期および2021年度春学期、また、対面授業も再開された2021年度秋学期も、オンライン授業に関する評価は、他大学と同様に高かった。特に、「自分のペースでのびのびと学習できる」という点に関しては40%以上が肯定的な回答をしている。一方で、「緊張感が足りず気が緩んでしまう」といった否定的な評価は21.7%から13.4%で推移しており、否定的な評価をする学生の割合は学期を追うごとに減少している。しかし、オンライン授業と対面授業のどちらの方が学習効果が高かったのかについては、このアンケート調査の結果だけではわからない。

オンライン授業へのアクセスについては、「うまくアクセスできない」という回答が0.6%から0.4%で推移していた。この場合も、学期を追うごとに減少している。ただ、「うまくアクセスできない」ことが、大学からのサポート（機材の貸与を含む）が足りないことに起因するのかどうかは、これだけではわからない。いずれにしても、ほとんどの場合問題なくオンライン授業

が実施できたと考えていいだろう。

関西学院大学全体におけるアンケート調査には、学生が、「対面とオンラインを比べる」質問項目はない。また教員に対してはアンケート調査を行っていない。そこで本研究では、関西学院大学のスペイン語教育に関して、学生と教員に対してアンケート調査を実施した。これは特定の言語教育に関して、学生と教員の両方を対象とした調査であるため、オンライン授業に関する新たな知見が得られるであろう。

Ⅲ スペイン語教育に関するアンケート調査結果

1. アンケート調査の概要

2021年度秋学期終了時（2022年1月）に、コロナ禍におけるスペイン語の授業対応についての記録と総括を目的として、学生と教員に対してオンラインによる匿名でのアンケート調査を実施した。学生に対するアンケート調査には、3人の教員が担当する13クラス（1年次5クラス、2年次8クラス）の履修者320人中162人（1年次61人、2年次101人）が回答した。一方、教員に対するアンケート調査には、2020年度～2021年度に授業を担当した教員27人中13人が回答した。

学生に対しては、この2年間に提供されたスペイン語の授業形態、満足度の高かった授業形態、対面授業への出席の有無、試験形態、遠隔授業と対面授業に対する満足度、遠隔授業で経験した活動などについて尋ねた。教員に対しては、各学期の担当授業、授業形態、評価（試験）の実施方法、それぞれに対する評価・意見などについて尋ねた。

2. 学生によるコロナ禍の授業形態および試験形態への評価

まずは、学生に対して実施したアンケート調査の結果を見たい。学生に対しては、この2年間で、スペイン語の授業として、どのような授業形態の授業が提供されたか、そのうち最も満足度が高かった授業形態はどれか、対面と遠隔のどちらが満足度が高かったか、理解しやすかったか、学習負担

が大きかったかなどを尋ねた。

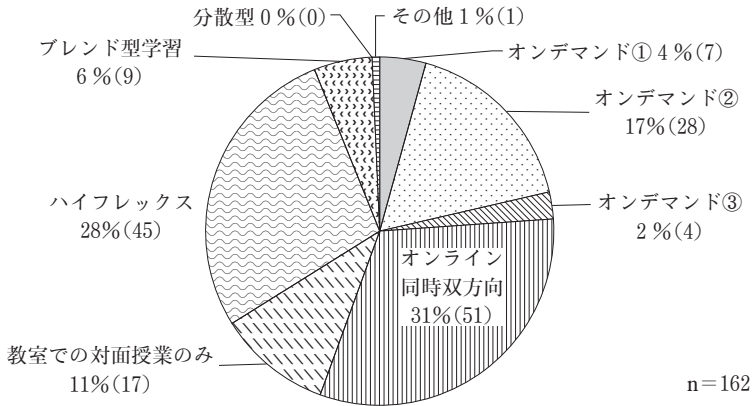
2.1. 満足度が高かった授業形態

アンケート質問票では、コロナ禍の授業形態を、1. オンデマンド①：解説資料配布（動画なし）、練習問題などを関西学院大学のLMS（学習管理システム）であるLUNAやMicrosoft Formsなどで実施、2. オンデマンド②：教員が作成した動画で解説、練習などをLUNAやFormsなどで実施、3. オンデマンド③：既存の動画（YouTubeや学外の教材）で解説、練習などをLUNAやFormsなどで実施、4. オンライン同時双方向：オンライン会議システムZOOMやMicrosoft Teamsで授業時間にライブ授業を実施、5. 教室で対面授業のみ、6. ハイフレックス：教室で対面を実施し、その様子をオンラインで同時配信、7. ブレンド型学習：対面とオンラインを授業日や内容に応じて組み合わせる形で実施、8. 分散型：クラスの受講者を複数グループに分けて、グループごとに教室に来る日を分けて対面授業を実施。教室に来ないグループの学生はオンラインで受講、9. その他、の9種類に分類した¹⁾。

その上で、「この2年間に受講したスペイン語の授業形態の中で、あなたの満足度が最も高かったものを一つ選んでください」という質問をした。その結果が第1図である。「オンライン同時双方向」を選んだ学生が51人（31%）で最も多かったが、「ハイフレックス」（45人、28%）と「教室での対面授業のみ」（17人、11%）を合わせると、教室で提供される授業の満足度が高かったことがわかる。これらの形態はすべて同時双方向で実施されるものである。「ブレンド型」も含めると、75%以上の学生がリアルタイムで実施される授業の満足度が高かったと回答したことになる²⁾。

-
- 1) この2年間に提供されたスペイン語の授業について尋ねたところ、「分散型」と「その他」を選んだ学生はいなかった。
 - 2) この調査には、オンデマンド授業を経験していない学生も参加したが、それらの学生を除いた学生104名のオンデマンド授業経験者のみのデータを集計したところ、オンデマンド授業の満足度が最も高かった学生の割合は34%に上昇したが、それでもリア

第1図 学生にとって満足度が最も高かった授業



一方、いずれかの形態のオンデマンド授業を選んだ学生も39人（23%）いたことから、オンデマンド授業にも学生にとって利点があったと言える。そこで、次節ではそれぞれの授業形態の満足度が高かった理由について見てみたい。

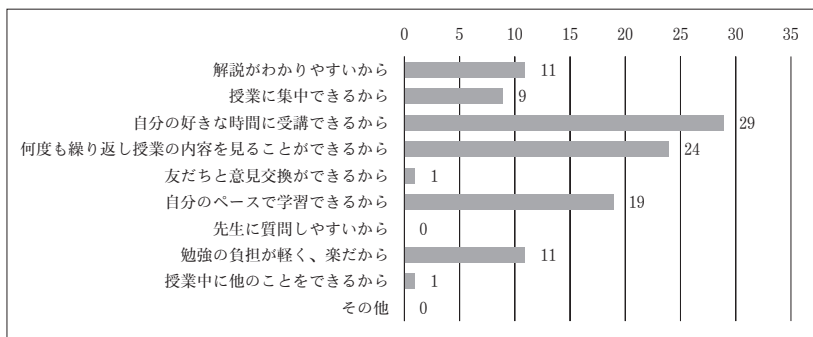
2.2. 満足度が高かった理由

アンケート調査では、最も満足度が高かった授業形態を選んだ理由についても尋ねた。「解説がわかりやすいから」「授業に集中できるから」「自分の好きな時間に受講できるから」「何度も繰り返し授業の内容を見ることが出来るから」「友だちと意見交換ができるから」「自分のペースで学習できるから」「先生に質問しやすいから」「勉強の負担が軽く、楽だから」「授業中に他のことをできるから」「その他」の10の選択肢を用意し、複数回答を可能とした。

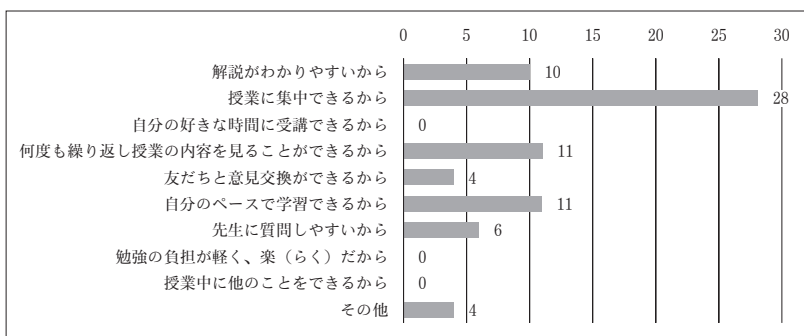
いずれかの形態の「オンデマンド」を選んだ回答者（39人、23%）が、その授業形態が最も満足度が高かったと回答した理由（第2図）を見ると、

ルタイムの授業の満足度が最も高かったとの回答が65%を占めた。

第2図 「オンデマンド授業」の満足度が高かった理由



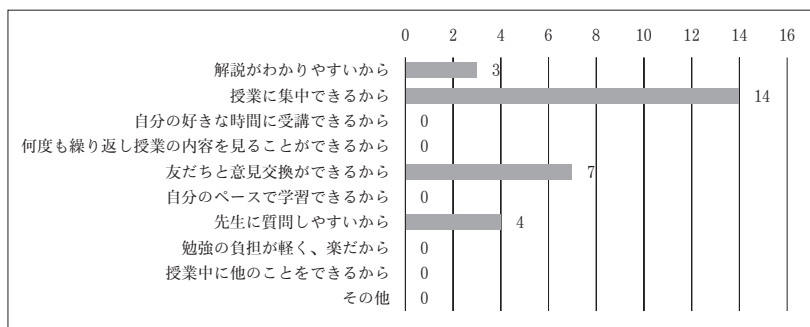
第3図 「オンライン同時双方向」の満足度が高かった理由



「自分の好きな時間に受講できるから」(29人)「何度も繰り返し授業の内容を見ることができるから」(24人)「自分のペースで学習できるから」(19人)を選んだ学生が多かった。つまり、オンデマンドの特性である、学習時間に制約がない点がこの授業形態の満足度を高めたと考えようである。

次に、「オンライン同時双方向」の満足度が高かったと回答した学生(51人)がその選択肢を選んだ理由(第3図)を見ると、「授業に集中できるから」(28人)が最も多かった。一方で、「オンデマンド」の満足度が高かった理由に「勉強の負担が軽く、楽だから」を選んだ学生が11人いたのに対し、「オンデマンド同時双方向」では1人もいなかった。これらのことから、「オ

第4図 「教室での対面授業のみ」の満足度が高かった理由



「オンライン同時双方向」は「オンデマンド」よりも学生に学習に集中できる環境を提供し、しっかり学習する機会を提供できたと言えそうである。

また、欠席者に配慮して、授業の記録動画をクラウド上で公開したこともあり、「何度も繰り返し授業の内容を見ることができるから」「自分のペースで学習できるから」(11人)を選んだ学生もある程度いた。このことから、「オンライン同時双方向」は授業を録画、公開できるため、オンデマンドとしての利点もあり、かつ、学生の自律学習を促す側面もあることがわかった。

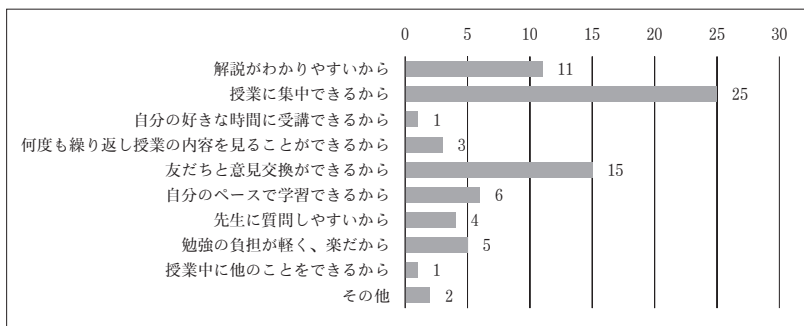
「その他」の自由記述を見ると、通学する負担がないこと(2人)、他の学生のペースに左右されにくく自分のペースで学習できること(2人)、ネイティブ教員による丁寧な発音の解説や練習の機会が提供されたこと(1人)が理由として挙げられていた。

2021年度には「教室での対面授業のみ」を実施した教員もいたが、この授業形態の満足度が高かったと回答した学生(17人)の理由(第4図)を見ると、「授業に集中できるから」(14人)という回答が最も多かった。

「オンライン同時双方向授業」と「教室での対面授業」の組み合わせである「ハイフレックス」の満足度が高かったと回答した学生(45人)が上げた理由は第5図のとおりである。

この授業形態も「授業に集中できるから」という理由を上げた回答者が最も多かった。「その他」の自由記述を見ると、通学の負担がないことなどオ

第5図 「ハイフレックス」の満足度が高かった理由



オンライン授業の利点が挙げられていた。

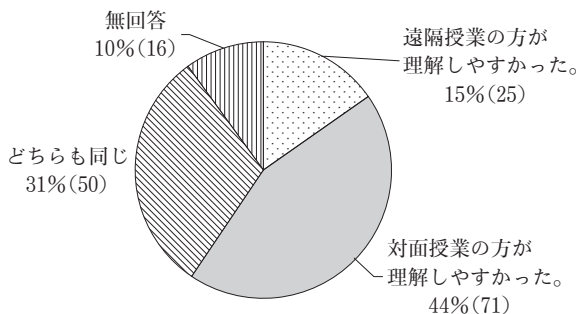
「オンライン同時双方向」、「教室での対面授業のみ」、「ハイフレックス」はいずれも時間割上の決まった時間にリアルタイムで実施されるという共通点がある。これら3つの授業形態の満足度が高かった理由としては、いずれも「授業に集中できるから」という理由が最も多かった。一方、「オンデマンド」の満足度が高かった理由は、時間に制約がないということであり、これらはポストコロナの言語教育の授業のあり方を考える上でヒントになるだろう。

2.3. 対面授業と遠隔授業について

では、遠隔授業と教室での対面授業のどちらが学生にとって良かったのだろうか。まずは、全体としてどちらのほうの満足度が高かったのかを尋ねた。「教室での対面授業の方が良い」を5、「遠隔授業の方が良い」を1として、5段階で評価してもらったところ、平均値3.23、中央値3、最頻値4になった。つまり、対面授業に満足する学生がやや多かったものの、評価にばらつきがあり、一概に遠隔と対面のどちらが学生の満足度が高かったとは言えないことがわかった。そこで、それぞれの授業形態のどちらが理解しやすかったかを尋ねたところ、第6図のようになった。

「対面授業の方が理解しやすかった」という選択肢を選んだ学生が71人、

第6図 対面授業と遠隔授業のどちらが理解しやすかったか

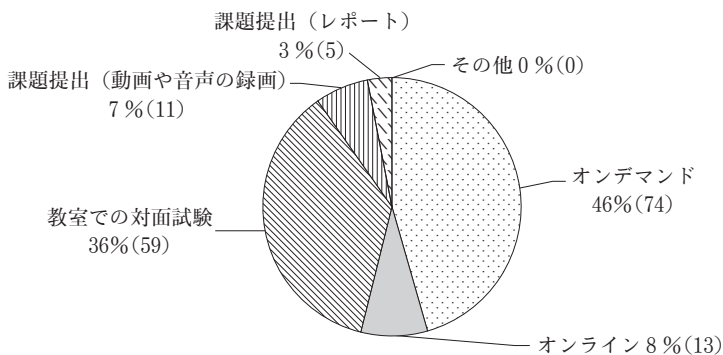


44%であった一方で、「遠隔授業の方が理解しやすかった」と回答した学生は25人、15%であった。しかし、「どちらも同じ」と回答した学生も50人、31%と多かったため、単純には遠隔授業の理解度が低かったと結論づけることはできない。

2.4. 試験・評価の実施形態について

試験の実施形態については、「この2年間に受験したスペイン語の授業の試験のうち、どの試験形態が最も良いと思いましたか」と質問した(第7図)。「オンデマンド試験」が良かったと評価した学生の割合が46%(74人)と最

第7図 どの試験形態が良かったか



も高かったが、「教室での対面試験」(59人、36%)と「オンライン(同時実施)試験」(13人、8%)とを合わせたリアルタイムの同時実施の試験が良かったと回答した学生の割合(72人、44%)も同様に高く、評価が分かれる結果となった。

そこで、それぞれの試験形態が良かった理由を記述した自由回答の主な内容を紹介する。

「オンデマンド試験」が良かった理由としては、「時間管理が容易にできたため」「好きな時間にできるから」「自分のペースでできるから」という時間的制約がない点を評価する意見が多く見られた。また、「家でリラックスして受けられるから」「集中できるから」という受験環境に関する利点を理由として挙げた学生もいた。これらは、「オンデマンド試験」の利点と言えるだろう。一方、「負担が少ないから」「楽だから」という意見や、「オンライン授業で理解度が低いのに対面試験では難易度が高すぎる」という意見もあった。つまり、「オンデマンド試験」は難易度が低く、楽であるという評価が一部の学生の間にはあるようである。これは、3.2で見えるような、「オンデマンド試験」の実施の難しさや不正行為防止の難しさについての教員の意見とも対応するもので、今後この実施形態で試験を行う際には留意すべき点だろう。

「オンライン(同時実施)試験」が良かった理由としては、「日時が決まっ
ていて計画を立てて勉強しやすいから」というものがあつた。これは「オンライン試験」の特性ではなく、特定の日時に同時に試験を実施するという従来型の試験の利点を評価する意見と言えよう。

試験に代わる「課題提出」が良かった理由としては、「じっくり取り組めるから」「課題に教員からコメントがもらえて、勉強になったから」「緊張せずに実力を発揮できたから」など、試験では計りにくい継続的な学習への取り組みが評価される点を評価する意見があつた。一方で、「対面試験より負担が少なかった」という意見もあり、課題の内容次第では学生が楽をしようとする可能性がある点は留意する必要がある。

「対面試験」が良かった理由としては、「緊張感があるから」、「強制的に勉強する必要があるから」「しっかりと勉強できるから」「実力が測られるから」といったものがあつた。やはり日時が決まることで勉強する動機が高まる利点はあると言える。また、「不正ができず、公平な評価が行われるから」「(通信)³⁾トラブルがないから」という理由も複数の学生が上げており、「オンライン試験」や「オンデマンド試験」が不正を防ぎきれず、真面目に取り組む学生が不正をする学生に対して不公平感を感じることや、通信状況などの障害で実力が測定されないことへの懸念が、一部の学生の間にあることがわかつた。

3. 教員によるコロナ禍の授業形態・試験形態への評価

関西学院大学で2020年度～2021年度にスペイン語の授業を担当した全教員(27人)が回答した授業形態や評価(試験)形態についての調査結果は、すでに柿原・禪野(2022)で紹介した。ここではコロナ禍で実施した授業形態についての教員自身の評価、授業準備時間の変化、オンライン試験による平均点の変化などについて尋ねた別のアンケート調査(27人中13人が回答)の結果を提示して、分析する。

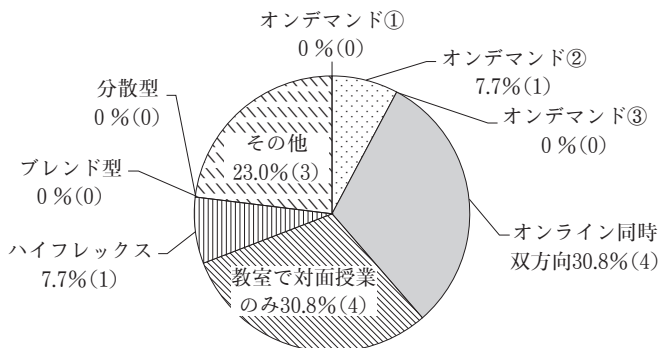
3.1. 授業について

コロナ禍で実施した授業についての教員自身の評価については、「この2年間のコロナ禍において、あなたが実施した授業形態で、最もよかったと思えるものをお選びください」という質問と、「この2年間の授業は、2020年以前の従来の授業と比べて、教育効果に変化があったと思いますか?」という質問への回答を示す。

「最も良かったと思える」授業形態は、第8図のように、オンライン同時双方向授業と、教室での対面授業と回答した教員がそれぞれ4人(30.8%)

3) ()内筆者補足。

第8図 教員にとって「最も良かったと思える」授業形態



で最も多かった。ただし、「その他」を選んだ教員も3人(23.0%)いて、内2名がコメントを残した。それによると、1人は「オンデマンド、オンライン双方向、対面授業(ハイフレックス含む)、ブレンド型、分散型の全てを経験したが、どれが最も良かったかの判断はできない」のように評価の難しさを指摘し、もう1人は、「同時双方向かオンデマンドのいずれが良かったかは判断が難しい。同時双方向は瞬時のインタラクションができて良いが、対面授業を再開した際、出席できない学生のために(教室から配信した)⁴⁾同時双方向授業のビデオを後で視聴させたが、それよりもオンデマンド授業のほうが良かった」とコメントした。これは、オンデマンドと同時双方向にはそれぞれに長所があるということである。また、「ハイフレックス」「対面授業」「同時双方向」を選んだ教員もコメントを記述していた。「ハイフレックス」を選んだ教員は「実施した中ではハイフレックスが一番良いと感じたが、全員対面授業というのが実際のところ一番やりやすい」と、対面授業を「やりやすい」と評価していた。「対面授業」を選んだ教員のコメントは、「対面授業にたまに遠隔で出席した学生もいて、対面授業といっても、伝統的な教室のみの授業ではない」というもので、教室と遠隔の区分がつきにく

4) () 内筆者補足。

く、新たな授業形態の出現を指摘するものであった。

「この2年間の授業は、2020年以前の従来の授業と比べて、教育効果に変化があったと思いますか？」という質問に対しては、教育効果が「向上した」「低下した」「変わらない」「その他」という選択肢を提示したが、教育効果を客観的に測り、比較する方法はないため、あくまで教員の印象を尋ねたに過ぎない。

「低下した」が5人(38.5%)、「変わらない」が2人(15.4%)だったが、「向上した」という回答をした教員はいなかった。これだけのデータでは何も言えないが、急遽実施することになり、手探りで対応したこの2年間の授業の効果に対して肯定的な評価するのが難しかったのかもしれない。「その他」を選択した教員のコメントには、この2年間しか担当したことがないために判断できないというもののほか、効果を測定していないため効果があったとは言い切れないと断った上で、「オンライン同時双方向型授業のほうが聴解練習や文化的な紹介時間を取れた」「小テストの回数が増えた」というものがあった。また、オンデマンド授業を継続した教員からは「文法と語彙に関して学生が考えなければいけない内容に関しては、授業時間の制約や、常に質問されるというプレッシャーがないため、質が向上したと思う。一方で音声と発音については他の年よりもしっかり扱わなければいけなかった」というコメントがあった。

毎回の授業準備に要した時間について尋ねたところ、平常時に比べて「2時間以上長くなった」と回答した教員が6人(46.2%)、「1～2時間長くなった」が5人(38.5%)で、「変化なし」が1人(7.7%)、無回答が2人(15.4%)だった。最後に設けた自由記述欄へのコメントの中に、授業準備に触れたものがあったが、その中には「準備」だけで確実に2時間以上長くなったことに加え、課題添削に膨大な時間がかかりました。2021年度は例年通りでした」というものがあった。他にも、2年目は短くなったとコメントした教員がいた。準備と課題の添削だけでなく、学生からのメールによる質問などが増え、対応に時間を要したというコメントもあった。

3.2. 試験、評価について

柿原・禪野（2022）で見たように、2020年度は、学生が一斉に受験するオンライン試験を実施した教員が最も多く（18人、66.7%）、一定期間内の好きな時に受験できるオンデマンド試験（春学期7人、25.9%、秋学期6人、22.2%）がそれに続いた。しかし、2021年度春学期は好きな時に受験できるオンデマンド試験を選んだ教員が5人（18.5%）に減少し、一斉実施のオンライン試験（20人、74.0%）に加え、対面試験（6人、22.2%）を選択した教員が多くなった。2021年度秋学期10月の「活動制限解除」以降は、対面試験を実施した教員（14人、51.9%）が最も多くなった。

この原因としては、多くの教員にとって初めて実施することになったオンライン試験の実施の難しさがあったと考えられる。自由記述欄への書き込みの中にも、カンニングや不正（ネット検索、機械翻訳の使用や教科書を見て受験する）を完全に防ぐことができなかったというコメントが見られた。また、オンライン試験やオンデマンド試験の点数（平均点）が通常の試験と比べて変化したかを尋ねた問いに対しては、「やや上がった」と回答した教員が多かった⁵⁾。そのため、自由記述欄には、オンライン試験で不正ができないような試験を考えることに苦勞したというコメントや、対面授業を再開したら、オンラインの小テストで出題していたレベルの簡単な問題が解けない学生がいたというコメントがあった。

IV アンケート結果のまとめ

Ⅲ-2. で見たように、学生はオンデマンド授業について時間的制約がない点を高く評価した。しかし、一方で負担が軽くて楽だったという感想も見られ、活動内容を工夫しなければ、単に楽な授業となってしまう可能性が高いと言える。一方、オンライン同時双方向授業と教室での対面授業は、授業に集中できたと考える学生が多かった。ある程度緊張感を持って集中力を持続

5) 回答者13人中、「大きく上がった」0人、「やや上がった」9人（69.2%）、「やや下がった」0人、「大きく下がった」0人、「変化はなかった」4人（30.8%）。

させるためにも、同じ時間に一斉に授業をし、双方向のやり取りがある授業形態が望ましいと言えよう。ただし、遠隔授業と教室での対面授業のいずれがより良かったかに関しては、学生の評価は分かれた。

試験・評価に関しての学生の評価は、オンデマンド試験は、オンデマンド授業と同様に、便利である反面、内容次第では実力が測れず、不正もしやすく、あまり好ましくはないことがわかった。オンライン同時双方向試験と教室での対面試験は、いずれも日時が決まっている点で、目標を立てて勉強しやすいという利点があることがわかった。ただし、オンライン試験は不正を防ぎきれない点で一部の学生は不満に感じていることもわかった。課題提出による評価は真面目に取り組む学生にとっては学習満足度が高いことがわかったが、オンデマンド試験同様に課題の内容次第では真面目に取り組まない学生も出てくるため、注意が必要である。

一方で、Ⅲ-3. で見たように、この調査に回答した教員の多くは、遠隔授業についての評価は難しいとしつつも、対面授業が最も「やりやすい」と評価しており、コロナ禍の対応は非常に難しいものであったことは確かなようである。ただし、授業準備などは1年目には大きな負担となったものの、2年目にはそのノウハウを利用でき、それほど大きな負担にはならなかったことと、オンデマンドもオンライン同時双方向も、一度準備すれば、教材を再利用できることから、負担は軽減されることがわかった。また、活動内容によっては、オンデマンドやオンライン同時双方向のほうが対面授業よりも教育効果が高いと考える教員もいた。試験・評価については、オンライン試験の場合、カンニングなどの不正を防ぐことが難しく、活動制限が緩和されて以降は、多くの教員が教室での対面試験を実施した。

これらを踏まえ、コロナ禍に実施した遠隔授業で得られた経験を今後の授業改善に生かしていく必要があるだろう。具体的には、文法解説や反復練習など時間がかかる内容の教材、学生により所要時間が異なる課題などをオンデマンドで提供し、学習者が好きな時間に繰り返し取り組めるようにすると良いだろう。ただし、その際、緊張感を持って集中して取り組めるような工

夫をする事が重要である。例えば、課題への取り組みを評価対象としたり、時間制限を設けるなどである。そのうえで、発音指導や他の学習者との協働活動など、空間を共有することでしかできない活動を教室で実施するのである。また、教室での解説あるいは事前に作成した解説などをオンデマンドでも提供し、くり返し学べるようにすることで、一度きりの授業で聞き逃した内容などをじっくりと学ぶことができれば、学習者の満足度はより高いものとなるだろう。

成績・評価に関しては、今回の調査では従来どおりの試験の利点が肯定的に評価される結果となったが、これは決して暗記を中心とする従来型の授業と試験を続けていけば良いということではない。教員と学生の双方の意見から明らかになった課題は、公平性の確保である。そのため、試験では、単に暗記した内容を問うのではなく、授業で得た知識を応用して、しっかりと考えなければいけないような内容とすべきだろう。また、たとえ教室外で参照物を用いたとしても、自身で考えなければ解決できない課題を課すことが重要となるだろう。

今後も、自然災害や感染症の発生により、予定通りに教室での試験が実施できない事態が生じることも想定される。その場合のためにも、今回のコロナ禍で得られた経験を踏まえた新たな評価方法を考えていくことが喫緊の課題と言えよう。

V おわりに

2022年度春学期には、感染状況が沈静化し、ワクチン接種が進んだこともあり、重症化リスクも減り、多くの大学で対面授業が再開されることになった。関西学院大学でも対面授業が再開され、正常化に向かいつつある。

オンライン授業には、固有の長所があることは、関西学院大学の学生を対象としたアンケート、他大学の学生へのアンケートや、本論文に提示したデータからも明らかである。

今後も大学では引き続き対面授業が主になるであろうが、それでも、この

2年近くの経験を経て得られたオンライン授業の長所に関する知見を生かしていくべきである。今後、いかに対面とオンラインの長所を取り入れた授業を展開するかが課題である。

たとえば、関西学院大学のスペイン語では、まだ全体的に取り入れてはいないが、先述のように、オンライン教材をうまく使えば、効果的な反転授業、すなわち、オンライン教材で学生は先に学習し、授業では事前に得た知識を使ってグループディスカッションをしたり（Tanabe, Fraser and Davies 2022 参照）、問題を解く（オンラインのクイズ機能を使うことも含む）ことも可能である。

しかし、問題は、誰が充実したオンライン教材を準備していくのか、ということである。筆者らの考えでは、それは専任教員である。日本のどの大学も、言語教育を大きく非常勤講師に依存している。しかし、非常勤講師は、複数の大学で授業を担当しているのが一般的であり、それぞれの大学に最適化したオンライン教材の準備を強要することは、労働時間の面から見ても、不当とも言える。しかし、授業の進度や、教科書が統一されていなかったら、たとえ専任教員がいても、同じ大学内の同じ語種の複数の授業ですらも、オンライン教材を効果的に使用できない。柿原・禪野（2022）で記述したように、関西学院大学のスペイン語は、全学部全クラスで、進度や教科書をそろえている。また、教科書各課の文法事項や練習問題を解説する動画を作成し、YouTubeなどにアップしている。このような状態であれば、9学部44クラス約1,200人の学生がいても、効率的に授業運営をすることができる。非常勤講師がオリジナルの教材を作成する場合は、すでに専任教員が用意したものを元にしてアレンジすることができる。

コロナ禍のオンラインおよび対面授業の経験を経て、私たちは、学生の意欲と能力を高める効果的な授業のあり方だけでなく、それを実現させる専任教員の仕事や、運営のあり方を改めて見直す必要があるのではないだろうか。

（筆者（柿原・禪野）は関西学院大学商学部教授）

引用文献

- Tanabe, Julia; Fraser, Simon and Davis, Walter (2022) "Using Online Flipped Learning for Teaching English Language Speaking Skills at a Japanese University" 『広島外国語教育研究』 25号, 29-44頁
https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/5/51959/20220228100859215309/h-gaikokugokenkyu_25_29.pdf (最終アクセス2023年1月6日).
- 柿原武史・禪野美帆 (2022) 「大学の言語教育におけるオンライン遠隔授業の経験と今後の可能性—スペイン語教育のコロナ禍への対応から考える」 『商学論究』 第70巻第1・2号合併号 関西学院大学商学研究会 pp. 689-707.
- 関西大学 (2020a) 「2020年度春学期実施『遠隔授業に関するアンケート』結果から見たこと (ダイジェスト版) 教学 IR プロジェクト」
https://www.kansai-u.ac.jp/ir/online_survey_2020sp_digest.pdf (最終アクセス2022年10月4日).
- (2020b) 「2020年度秋学期実施『対面授業に関するアンケート』結果から見たこと (ダイジェスト版) 教学 IR プロジェクト」
https://www.kansai-u.ac.jp/ir/taimen_survey_2020au_digest.pdf (最終アクセス2022年11月19日).
- 関西学院大学高等教育推進センター (2020a) 「2020年度春学期『学修行動と授業に関する調査』全学集計結果」
https://www.kwansei.ac.jp/cms/kwansei_highedu/pdf/jyugyotyosa_kohyo/2020年度_春学期_学修行動と授業に関する調査_全学集計結果.pdf (最終アクセス2022年11月19日).
- (2020b) 「2020年度秋学期『学修行動と授業に関する調査』全学集計結果」
https://www.kwansei.ac.jp/cms/kwansei_highedu/pdf/jyugyotyosa_kohyo/2020年度_秋学期_学修行動と授業に関する調査_全学集計結果.pdf (最終アクセス2022年11月19日).
- (2021a) 「2021年度春学期『学修行動と授業に関する調査』全学集計結果」
https://www.kwansei.ac.jp/cms/kwansei_highedu/pdf/jyugyotyosa_kohyo/2021年度_春学期_学修行動と授業に関する調査_.pdf (最終アクセス2022年11月19日).
- (2021b) 「2021年度秋学期『学修行動と授業に関する調査』全学集計結果」
https://www.kwansei.ac.jp/cms/kwansei_highedu/pdf/jyugyotyosa_kohyo/2021_aki/2021年度_秋学期_学修行動と授業に関する調査_全学集計結果.pdf (最終アクセス2022年11月19日).
- 京都ノートルダム女子大学 (2020) 「オンライン授業に関するアンケート調査 (学生) 結果概要報告」 京都ノートルダム女子大学教務委員会
https://www.notredame.ac.jp/pdf/cms/2020online_houkoku.pdf (最終アクセス2022年11月19日).
- 同志社大学 (2020) 「同志社大学2020年度臨時学生調査結果第1次調査『ネット配信授業に関するアンケート調査』(6-7月実施) 第2次調査『コロナ禍における授業に関するアンケート調査』(10月実施)」

https://clf.doshisha.ac.jp/attach/news/FACULTY_DEVELOPMENT-NEWS-JA-148/146432/file/2020SpecialSurveyResults.pdf (最終アクセス2022年11月19日).

武蔵大学 (2020a) 「2020年度後学期オンライン授業アンケート結果 (学生)」武蔵大学 FD 委員会

<https://www.musashi.ac.jp/about/activities/ahdlv300000003me-att/eu48bl000000jn4m.pdf> (最終アクセス2022年11月19日).

———— (2020b) 「2020年度オンライン授業アンケート結果 (教員)」武蔵大学 FD 委員会

<https://www.musashi.ac.jp/about/activities/ahdlv300000003me-att/eu48bl000000jn54.pdf> (最終アクセス2022年11月19日)

———— (2020c) 「オンライン授業に関する学生アンケート結果を公表—大学として何ができるのか—」

<https://www.musashi.ac.jp/news/eu48bl0000005wfs-att/eu48bl0000005wh0.pdf> (最終アクセス2022年11月19日).

文部科学省高等教育局総合教育政策局 (2020) 「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査 (結果)」

https://www.mext.go.jp/content/20210526-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf (最終アクセス 2022年11月19日).

立教大学 (2020) 「オンライン授業に関する学生意識調査 (立教大学経営学部調査) 経営学部学部長/経営学部データアナリティクスラボ

<https://www.rikkyo.ac.jp/news/2020/09/mknpps000001bg3b-att/report.pdf> (最終アクセス2022年11月19日).

早稲田大学 (2020a) 「オンライン授業に関する調査結果 (2020年度春学期)」<https://www.waseda.jp/top/news/70555> (最終アクセス2022年11月19日).

———— (2020b) 「オンライン授業に関する調査結果 (2020年度秋学期)」

<https://www.waseda.jp/inst/ches/news/2021/05/17/3291/> (最終アクセス2022年11月19日).